症例報告

非定型的周期性外斜視

梅田千賀子・中西 高子・佐藤 彰子

眼科 杉田病院

Chikako Umeda, Takako Nakanishi, Akiko Sato

要 約

非定型的周期性外斜視の1例について報告した。

症例は生後1ヶ月頃より「良い日」、「悪い日」の非定期的外斜視を示しはじめていたが、改善せず3歳7ヶ月より治療を開始した。視能訓練、プリズム療法、手術と加療し眼位、融像巾の安定は得たものの遠見立体視が得られず満足のゆくものではなかった。

術後10年を経過するが現在も同様であり経過観察中である。

別冊請求先 (〒460-0008) 名古屋市中区栄5-1-30

眼科 杉田病院 梅田 千賀子

Tel. 052-251-6584 Fax. 052-261-5061

Key words :

非定型的周期性外斜視、周期性外斜視

I. 緒 言

周期性内斜視は斜視患者の3000～5000人^{1)～3)}に1人とされ、報告も多くされているが、周期性外斜視の発症率はさらに少なく12000～20000人に1人と推測され、多くは48時間周期と言われている^{4)～8)}。治療に関してはまだ確率されてはいないものの手術を施行すると結果が良好であるとの報告がある。^{4)～6)}しかし非定型的周期性外斜視の報告は今までに4例⁷⁾をみるのみである。今回我々は非定型的周期性外斜視と思われる1症例を経験しその臨床経過と長期観察の結果を報告する。

II. 症 例

現在15歳、女子、生後1ヶ月頃より母親が良い日と悪い日が明瞭に区別出来たが不定期である事に気付いた。

不定期な周期の繰り返しで全く眼位の改善がみられないので3歳4ヶ月に当院を受診する。2030gの未熟児で生まれ1ヶ月間保育器に入ったが発育には問題無く前眼部、中間透光体、眼底にも異常は無い。

初診時、3歳4ヶ月 視力、左右眼ともに字ひとつ視力で0.8、眼位は遠見XT40△、近見XT30△であった。2回目の検査時には良い日、遠見X8△、近見X12△であった。それ以降 良い日と悪い日が繰り返されるが悪い日は遠見XT25-30△、近見45△、良い日は遠見X6△、近見8△と10-15△の範囲内であり、XTの時は交代性の抑制を示し、眼位の良い時はTitumas Stereo Tests (以下TST)は100secの立体視が認められ

た。

しかし、眼位の良好な日でも輻輳は非常に弱く、輻輳近点は46cm、大型弱視鏡検査で融像巾、輻輳は3-10°、開散5°であったため、4歳5ヶ月より1/Wの視能訓練を開始し抑圧除去、融像巾の拡大、主に輻輳力の強化のためプリズムを負荷し輻輳させる訓練を積極的に行い、又家庭では輻輳カード等を指導した。2ヶ月経過後も輻輳力の改善がみられなかった為、できるかぎり両眼視を保つ事を目的に眼位の悪い日には斜位に持ち込める最小量のプリズム眼鏡を装用させた。(表1) 1年半、同方法で治療を行うが外斜視の日の頻度が多くなり5歳9ヶ月に右眼、外直筋7mm後転、内直筋7mm短縮の手術を施行した。(図1, 2, 3)手術量は斜視のある日の斜視角の全量、又はその半分の量などと賛否両論であるが、我々は全量を矯正目的とした。^{4)～6)}初診時より手術まで2年の経過中、良い日、悪い日それぞれの斜視角には変動がみられなかった。術前の眼位は、遠見Ortho、近見X10△であった。術後1日目の結果は遠見、近見ともにET20△と過矯正になったが、約1ヶ月でOrthoになった。術後の1ヶ月間もそれ以降も眼位の周期性な要素はみられる事無く安定しTSTは40sec迄可能になり良好だが大型弱視鏡による遠見立体視は簡単なブランコが可能なのみと不良であった。輻輳力も依然弱い状態だったので術後にも視能訓練を1/2Week、3-4ヶ月間追加し以後も1/Mのfollow-upをする。術後2年経過した頃、遠見、近見ともにX(T)が認められた為、再びプリズムを負荷した輻輳訓練を施行した。(図4)以後、再び眼位は安定を得、融像巾の拡大も得られるが遠見立体視は変わらずに浅い

表1 プリズム眼鏡装用期間中の1ヶ月例
P—プリズム眼鏡を装用した日 ○—良い日

1990年 8月									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
P	P	○	P	P	○	○	○	○	○
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
P	P	○	○	○	P	○	P	P	P
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
○	P	○	P	P	P	P	P	P	P

ものでしかなかった。現在15歳、術後10年経過しているが、眼位、融像巾等は安定し良好だが遠見立体視は不良のままである。(表2, 3)

図1 手術前日 (悪い日)

図2 手術当日 (良い日)

図3 手術までの経過

Ope前日	Ope 当日	Ope後 1 日目
XT30△ XT'45△	ORTHO X'10△	ET25△ ET'20△
2 M	2 Y	10 Y
ORTHO X'10△ TST4D'' 遠見立体視 ブランコ	X(T) 14△ X(T)'16△ 輻湊訓練追加	1/6M定期観察 Home Training X12△ X'20△ TST4D'' 融像巾良好 遠見立体視 ブランコ

図4 術後10年の経過

表2 術後眼位の経年変化

表3 治療経過

1989年 3月	初診
1990年 6月	プリズム眼鏡・視能訓練開始
1991年 9月	右眼、外直筋7mm後転、内直筋7mm短縮 10月→視能訓練 1/2w~1/M
1992年	1/M Follow up
1993年	3/Y Follow up
1994年	術後2年6ヶ月 X(T)出現 視能訓練再開
1995年	1/M
1996年	1/M
1997年	2/Y
1998年	2/Y
1999年	1/Y
2000年	1/Y
2001年	1/Y

Ⅲ. 考 按

非定型的周期性外斜視と思われる症例は発生頻度が非常に少なく定型的周期性外斜視と同様に病態やメカニズムも不明である。又非定型的周期性外斜視症例では経過を追っている報告はあるが、本症例のように手術を施行し10年の

長期経過をみた報告は無い。定型的周期性外斜視は術後の両眼視は非常に良好な報告が多く大型弱視鏡での立体視も認められているが、我々の経験した症例は治療の過程に視能訓練やプリズム療法を行っても治療効果は低かった。今までの報告での定型的周期性外斜視、非定型的周期性外斜視症例の発症年齢は生後3ヶ月⁸⁾が最年少だったが、本症例は生後1ヶ月より明らかに眼位の良い日、悪い日とを気づきはじめている。他の斜視、特に生後6ヶ月以前に発症した先天性乳児内斜視の様な早期発症のケースの予後があまり期待できないと同様に本症例においても、例え両眼視をさせようと治療し眼位の安定を得ても遠見立体視と言われる大型弱視鏡の立体視が低かった事は早期発症もひとつの要因と考えるべきなのか、又、定型的周期性と非定型的周期性との違いなのか、症例が1例のみとの事もあり今後、さらなる症例の集積と検討が必要であると考えます。

参考文献

- 1) Costenbader F.D., Mousel, D. K. : Cyclic esotropia, Arch. Ophthalmol. 71 : 180-181 1964.
- 2) Richter, C.P. : Clock - mechanism in children : Alternate day squint, John Hopkins Med. J. 122 : 218-223, 1968.
- 3) Roper-Hall, M. J., Yapp, J. M. S. : Alternate day squint, Transaction of the First International Congress of Orthoptics, 262-271, Henry Kimpton, London, 1986.
- 4) 椿原宏典、木井利明、西野和明、中川喬、佐藤律子：周期性外斜視の1例、眼臨85：1743-1746, 1991.
- 5) 安部理恵、栗屋忍、矢ヶ崎悌司、野崎尚志、永津和子：眼紀44：1439-1443, 1993.
- 6) 足立和孝、横山利幸、加藤和男、他：周期性外斜視の1例、眼臨88：451-453, 1994.
- 7) 福田雅子、竹田宗泰、木井利明、中川喬：臨眼52(12)：1793-1796, 1998.
- 8) 木井利明、中川喬、中井秀樹、福士直子：眼紀32：1164-1167, 1981